

羽村市史編さんだより

令和3年7月

第26号

伸びゆくはむら

特集『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』
『羽村市史 資料編 民俗』刊行



表紙の写真は今回刊行した
「考古・中世補遺」編、「民俗」編です。
ぜひお手に取ってご覧ください。

羽村市では、市域の原始から現代に至る歴史に、自然や民俗分野も含めた『羽村市史』の編さんを進めています。このたび、新たに資料編「考古・中世補遺」と「民俗」を刊行しました。今回は、この新刊2冊の見どころを紹介します。

『羽村市史 資料編 考古・中世補遺』

原始・古代・中世を担当する第1部会による2冊目の資料編です。「考古」と「中世補遺」の2部構成になっています。

表紙には羽ヶ田上遺跡第8次調査にて良好な状態で残っていた縄文時代中期の終末期に見られる柄鏡形敷石住居、裏表紙には石造物を除くと市域唯一の中世史料である阿蘇神社天文五年銘棟札を掲載しています。



第1部 考古

『羽村町史』が刊行された昭和49年から現在までの間には、羽村市域や周辺地域の開発に伴う遺跡発掘調査が増加し、考古学の研究も進展してきました。今回の市史の内容は、羽村の発掘調査成果を見直し、現在の研究水準の中に位置づけることを試みています。

第1章は、羽村の発掘調査の歴史に始まり、羽村の地形環境と市域の遺跡立地の関係を考察しています。

第2章では、羽村市域で最も多く確認されている縄文時代の遺跡を取り上げています。精進バケ遺跡、天王台遺跡、山根坂上遺跡、羽ヶ田上遺跡と続き、それぞれの遺跡ごとに調査経過、住居跡等の遺構、出土した土器など主な遺物を紹介しています。発掘調査当時の現場スライド写真や、調査図面等を改めて確認し、得られた成果を反映しています。また、発掘調査報告書の中で土器実測図の掲載が無いなど、概要の資料掲示にとどまっていたものについても、情報の掲載を試みました。特に、山根坂上遺跡第3次調査分については、出土土器や土器破片の確認を行い、撮影、実測をし、多くの土器実測図を初めて住居跡ごとに見ることができるようになりました。羽ヶ田上遺跡では、遺物出土地点等の調査データの見直しを行

い、土器の出土状況や集落の変遷などの新しい研究成果も採り入れた考察を行っています。

第3章は、古墳時代から江戸時代までの遺跡をとり上げています。市指定有形文化財の阿蘇神社の中世瓦などの採集資料について新たに調査・実測を行い、図版と写真を合わせて見ることができるようになっています。『羽村町史』で取り上げられていたNo.3遺跡（根搦前遺跡）、No.7遺跡（鍛冶遺跡）の資料については、今回改めて資料を確認し、詳細な調査を行いました。また、市指定史跡の吉祥寺跡、東京都指定史跡のまいまいず井戸も紹介しています。専門家の方々と意見交換を行い、検討した内容も反映しています。

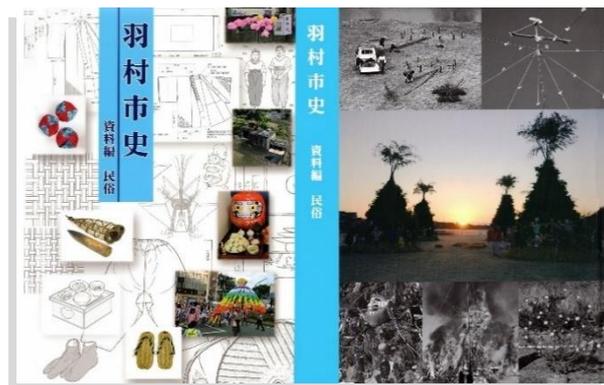
第2部 中世補遺

『羽村市史 資料編 中世』刊行後、新たに調査を行うことができた資料がありました。第2部では、それらの中世資料を「中世補遺」という形で収録しています。三田氏関連史料、阿蘇神社所蔵棟札類、石造供養塔（板碑）がとり上げられています。阿蘇神社の木製棟札は赤外線撮影を行い、文字の判読が一部できるようになりました。『資料編 中世』とあわせてご覧いただけたら幸いです。

『羽村市史 資料編 民俗』

民俗を担当する第5部会による資料編です。本書は3部構成です。

表紙を飾るのは各部を構成する「人びとの暮らし」「多摩川」「春祭り」に関わる写真や図です。裏表紙はどんど焼きの写真で、朝焼けが美しい写真を中心に、調査で撮影した写真をレイアウトしました。



第1部 羽村市の暮らしと民俗

第1章と第2章で羽村市の位置や環境、歴史をまとめています。先行の『資料編 近世』に詳細があるとおり、羽村市域は、近世には羽村、五ノ神村、川崎村の三村で構成されていました。その後、ほぼその範囲を変えずに現在に至ります。昭和30年代以降、市域の開発が進み、それに伴い生業や住まい、暮らし方が変化していきます。

第3章以降は、生業の変遷（第3章）、衣食住の様子と習慣（第4章）、家や地域で行われる年中行事（第5章）、出産・婚姻・葬送といった人生儀礼（第6章）、家や地域に残る信仰（第7章）、市域に残る昔話や伝説（第8章）など、人びとの暮らしにかかわる民俗について取り上げ、その様子や変化を描いています。

第2部 多摩川をめぐる民俗

『資料編 自然』で得られた崖線の調査成果を踏まえて、市域の人びとの暮らしと、多摩川とのかかわりについて取り上げています。

多摩川に近いハケ下では、洪水と向きあいながらも、多摩川に親しみ恩恵にも浴してきました（第1章）。かつては仕事の合間に多摩川で漁をし、魚屋や料亭に卸すほどの名人もいたそうです。そういった人たちは数世代前となり、子どもの頃に身近な大人がやっていたのを見た、という世代が残るのみとなりました（第2章）。多摩川は危険な場所でありながら、子ども達にとっては身近な遊び場でもありました。年長者がガキ大将となり年下の子どもたちの世話をし、さまざまな遊びを通して川との付き合い方を覚えていきました（第3章）。

第3部 羽村の春祭り

第1章は春祭りの概要、第2章は、平成29・30年に行った春祭りの調査記録を中心に、各神社と町内会の春祭りについて歴史的経緯などがまとめられています。第3章、第4章では、各地区の神輿ぎおんばやしと祇園囃子、山車と祭礼囃子について、第5章では羽村の春祭りの特徴がまとめられています。

市民参加型で行われる「はむら夏まつり」、各神社で行われる秋祭りに対し、春祭りは市域全体で日程を統一して行われます。その原点は、各神社うじがみ（氏神）で行われていた春祭りです。川崎の神明神社、五ノ神の五ノ神社あすまちょう、東町の稲荷神社、奈賀町の玉川神社、加美町の阿蘇神社、それぞれの氏子域で行われていた八雲神社春季例大祭、そして松本神社の春季例大祭です。そこに町内会で催す春祭りが加わり、また、昭和25（1950）年より始まった桜まつりが、その後チューリップまつりを加え「花と水のまつり」として同時期に開催されています。

羽村の春祭りについてその全容をまとめた初の刊行物として、興味深い内容となっています。

第1部と第3部には、ひとつのテーマを掘り下げて紹介する「解説」と、箸休め的な読みもの「コラム」も登場します。

儀礼や習俗は、地域ごと、家ごと、世代ごとにやり方は異なり、変化もします。伝えられてきたもの、実際に行っていること、次の世代に伝えていくもの、どれもが“民俗”です。本書で取り上げたものは羽村市域の民俗のほんの一部ですが、お楽しみいただければ幸いです。

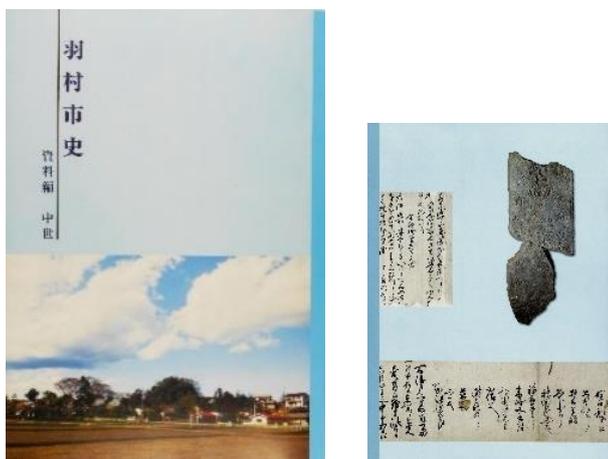
既刊紹介 好評販売中！ 各 2,000 円(税込)

これまでに刊行された『羽村市史 資料編』を紹介します。

『羽村市史 資料編 中世』

A 4 判 249 ページ

羽村市域を含む「^{そまのほ}杣保」一帯を支配していた三田氏などに関する史料や、市域にある石造供養塔を収録しました。



『羽村市史 資料編 近現代図録』

A 4 判 327 ページ

明治時代以降の羽村の景観や産業、教育、鉄道や暮らしの変化やあゆみをテーマ別に収録した約 680 点の写真資料で紹介しました。



『羽村市史 資料編 自然』

A 4 判 379 ページ

羽村市の地形・地質や気候、動植物について約 4 年間にわたる調査によって収集されたデータを分析し収録しました。



『羽村市史 資料編 近世』

A 4 判 306 ページ

江戸時代から明治時代の初めにかけての古文書や絵図を解説付きで掲載しています。新発見の史料や、初公開となる史料も収録しました。



ある日の午後、はむりんから編さん室長のスマホにメッセージが届いたようです。どうやら新しく刊行された資料編に興味津々の様子。どんなトークになるのか、ちょっとのぞいてみましょう。



ねえ、室長。
羽村市史に新しい資料編が出たってホント？

そうなんだよ、はむりん。
「考古・中世補遺」と「民俗」を刊行したんだ！



これで資料編が6冊になったけど、前に出た資料編も
「自然」とか「近世」とかテーマがバラバラだね！

たしかにね。でもね、はむりん、テーマは違っていても
それぞれの本には共通点があるんだよ。



えっ、共通点ってなんのこと？

それじゃあ、私が解説していきましょう。



編さん室長の

解説コーナー

この度、「羽村市史 資料編」の「考古・中世補遺」と「民俗」を刊行しました。左のページで紹介した既刊の4冊と合わせて、資料編は6冊となります。

資料編のテーマは6冊それぞれで異なっていて、一見すると関係ないようにも思えますが、載っている内容が実は深いところにつながっているということも多いのです。具体的な例を紹介しましょう。

例えば「ハケ」。市内に坂道が多いのはハケが関係しているといいますが、その仕組みは資料編の「自然」編を読むとよくわかります。また、ハケの上の平らな地形には、縄文時代の人々が住んでいた跡が残っていて、これは「考古」編の内容となります。

他にも「近現代図録」編には、ハケ上地域の開発の様子や街並みの変化の写りが載っていますし、「民俗」編ではそこで生活する羽村の人びとのくらしを紹介しています。このようにバラバラに見えるテーマでも、実は共通点や関係性があるというわけです。

他にも阿蘇神社は、とても古い神社であることからどの時代にも登場していて、資料編では6冊すべてに記事が載っています。

こうした事例以外にも、6冊の資料編からはたくさんのつながりを見つけ出すことができます。「羽村市史 資料編」を読めば、縄文時代から平成までの歴史の流れや、自然の大きな力、そして人びとのくらしの様子まで、様々な角度から羽村のことを知ることができるようになっていきます。

皆さんもぜひ手に取ってご覧ください。頒布場所は次のページに掲載していますよ。

羽村市史資料編 頒布場所

是非お買い求めください！
お待ちしております。



●羽村市役所 1階総合案内（平日 8:30～17:00）
〒205-8601 東京都羽村市緑ヶ丘 5丁目 2番地 1

●羽村市郷土博物館（9:00～17:00 ※月曜日休館ただし祝日の場合は開館）
〒205-0012 東京都羽村市羽 741

※各頒布場所で見本をご覧いただけます。羽村市図書館では販売していません。

※郵送での購入をご希望の方は市史編さん室までお問い合わせください。

電話番号 042-555-1111(内線 365)

メールアドレス s108000@city.hamura.tokyo.jp

「伸びゆくはむら」バックナンバーは以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室(市役所西庁舎3階)
- 羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは
コチラから



コラム

ちっとんべえ

第 26 回 「未知との遭遇」

皆さんは「タモ」という言葉を知っていますか？今回刊行した『資料編 民俗』にはこの言葉が出てきます。“掬い網”の存在は知っていましたが、それを“タモ”と呼ぶことを、今回の原稿校正に携わるまで、私は知りませんでした。

校正作業では、誤字脱字や内容の分かりやすさなどを確認するために、色々な人の目で原稿を通して読むことがあります。“タモ”とはそんな中で出会いました。

身近に全く知らない言葉があったこと、自分が知らないことを皆は当たり前のように知っていること、そして身近なものでも文字で説明するのはとても難しいことに気づくことができました。

そんな知らなかったものが気になって色々調べていくと、思いがけない情報も得られて、様々な世界観を感じられ、楽しいものです。

「タモ」に続く“未知との遭遇”を楽しみにしつつ、まだまだ続く本づくりに取り組みたいと思います。



※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。